

ひさとその女友達

廣津和郎

一

隣室の子供の泣声にひさは眼をさました。

毎日の事いふに三交は何かに動揺したやう

に急にけたたましく泣き出すのである。四才

かといふのに榮養の足りないうちめか發育が悪

く、眼が赤くなつて頭にクサの出来たおん

と笑つた事のよい女の子は、ひさかその母親

に對するお愛想かう「抱つて」といふとこ

ろと泣き出し、こゝれに寄つて来る事はなかつ

た。

ひさは一寸舌打ちした。併し舌打ちしたの

は、その女の子の泣声のためではない。梶野の

腕が自分の胸の上に重苦しくのしかかるとな

る事に気がついたからである。彼女はその煙に

その腕を拂ひつけ、腹筋にふつと軟許の煙

管を引き出す。一服吸ふ。五月の夜、ひさ

中央公論文芸特集 昭和十三年

本文、9木2段 28字詰 22行